哀しみの胸の底で

吉岡　昭

一　独り言

ポットに入れた水が沸くには、多少時間がかかる。
田嶋智太郎は、テーブルにポットを載せると立ったままの姿勢で窓辺に寄った。ベランダに続くガラス戸である。カーテンを開け放ったガラス窓を通して、朝の柔らかい陽光が降り注いでいる。風はないようだ。四階から見下ろせる団地の庭にある三本のヤブ椿の葉も微動だにしない。
「良い天気だ」
いつものように独り言が口を突いて出た。
「さて・・・・」
智太郎は、小さく背伸びをすると、パジャマを脱ごうと釦に手をかけた。だが、そこまでで、手は動かなかった。その代わり、柔和表情が一瞬、苦渋に満ちたものに変わった。
智太郎は昭和十一年生まれの六十歳。昨日の二月十五日が誕生日で、同時に退職の日でもあった。退職金の二千三百万円は、既に銀行に振り込まれてあるはずだ。
K証券会社に、つごう三十八年間勤めてきて、課長で身を引いた。名門の私立大学の経済学部を卒業しているが、特別な才能があったわけではない。だから、無事に退職できたという事実に納得するものがあった。しかし、同時に寂しさも味わった。
もう、二度と会社に出入りすることはないのだ。もちろん、同僚や部下と語り合う機会もない。上役との交際も論外だ。
昨夜は築地の老舗日本料理「花むら」で送別会をしてもらった。部長と部下が十八人集まって、和やかな引退式であった。期待もされなかったが、不必要な人間でもなかったようで、いやみを言う者はいなかった。
もっとも、その程度の人間たったということかもしれないが・・・・。

退職祝いにはスイス製の高級腕時計を貰った。こんな晴れがましい品を身につけたことはない。学生時代から国産品の一万円という腕時計をしてきた。外国制の腕時計は、十年前に勝手に結婚した娘のさおりが、新婚旅行の土産として買ってきたアメリカ制のキンピカでどぎついデザインのものが最初で最後と考えていた。この十年の間、電池を何度か取り替えただけで、ほかにはこれといった故障もなく無事に時を刻んできた。娘からのプレゼントだと思うと、愛着もひとしおだ。

だから退職祝いに頂いた高級品は、腕にはめてみようという気にはならない。とてもではないが、落ち着かないのだ。それに、娘から貰った腕時計が可哀想で、はずせない。娘の気持ちがこもっているか否かは分からないが、智太郎は勝手に娘の愛情を信じている。いや、信じないことには寂しすぎるのだ。

「そうだよな、千代子」

智太郎は仏壇に視線を泳がせた。そこには、退職祝いの高級腕時計が載せてある。線香立ての横に。そして、一段高い所には和服姿の女性の写真が一葉、飾られていた。

「やっと仕事から解放されたよ」

智太郎が声をかけると、写真の千代子がかすかに微笑んだような気がした。どちらかというと面長だが、切れ長の目が爽やかで、形のよい唇が上品だ。それに引かれるように、智太郎は仏壇の前に坐った。

「それにしても、ひどいよ。十五年も前に旅立つなんて・・・・」

昨夜もつぶやいた同じ台詞を、彼はもう一度繰り返した。

「申しわけありません」

これまた、昨夜と同じ千代子の優しい声がした。

「ずるいぞ、子どもたちをおれに押しつけて・・・・」

「あなたが先でなくてよかったんですよ。わたしでは育てられませんでしたもの」

「それにしても、おれはこれからどうしたらいいのか」

「のんびりなさいませ。まずは疲れをおとりになって！」

「そうだな。そうさせてもらうか」

智太郎はお鈴を鳴らすと、手を合わせ瞑想した。そして頭を垂れて、仏壇から離れた。

二　自立する子ども達

この団地は、千葉県の松戸市にある小金原で、智太郎は昭和四十年に買い求めた。六畳二間の和室に五畳の洋間、八畳のダイニング・キッチンで、三百六十万円であった。

もちろん現金では買えなかったので、頭金を百万円入れて、残金の二百六十万円は二十年のローンを組んだ。長女のさおりが六歳、長男の賢太郎が二歳のときであった。それから、既に三十一年が経った。当然のことだが、住宅ローンの支払いは済んだ。当時は決して安い買い物ではなかったが、返済し終えた昭和六十年ごろは、土地や建物が高騰して何倍かの資産価値になっていた。しかし、それは机上の計算だけであって、住んでいる以上は何の変化もなかった。ただ、税金が高くなっただけ損したようなイメージを抱いてきた。

さおりは成長して、もう立派なおとなになった。今は三十七歳になっているはずだ。生きているなら、ドイツから年に一度ぐらいは便りがあってもいいと考えるのだが・・・これも年老いたからの繰り言だろうか?。

智太郎はダイニングのテーブルに腰を下ろし、保温のマークが朱に変ったのを確認し、ポットのボタンを押した。もう、このポットも十五年になる。千代子が軽井沢の貸別荘で静養しているときに求めた一・八リットル入りのものだ。

コーヒーカップに入れたインスタントコーヒーが、お湯にとけて広がった。琥珀色をした溶液は智太郎の心を反映してか、澱んでいた。

「親不孝な子どもらだ」

智太郎は砂糖もミルクも入れない。にが味のあるブラックが好きなのだ。甘いのは口に合わない。純粋な味が失われる。これが彼流のこだわりであった。千代子やさおりに抵抗してのことではない。

さおりは亡くなった妻に似てミルクも砂糖も、たっぷり入れる娘だった。智太郎が、「それではコーヒー本来の味が・・・・」と注意しても、「とてもじゃないけど、にがくて飲めやしないわ」と、砂糖をスプーンで三杯も四倍もすくうのが常であった。それで、いつとはなく注意をしなくなった。口にすると、逆効果ということに気づいたからである。

「いつごろから、あんなに反抗的になったのだろうか」

声にしてみるが、これという覚えはない。中学生のときだったろうか? それと

も高校生のときだったろうか？　高校生のときは確かに狂っていた。学校へは行かずに、仲の良い女性徒同士、ジャズだの、バンドだのに凝っていた。髪も茶色に染めてはタバコも喫っていた。どちらかというと面長の色白で、目鼻だちも通っていて、自慢の娘だったのだ。

一度、彼は娘を殴ったことがある。もちろん、力を抜いた軽いものであった。娘は左頬に手を当てて、

「わたしは、お父さんの所有物ではないわ！」

と、彼を睨んだ。

「親が注意しないで、だれが注意してくれるんだ」

「よけいなお世話よ」

娘はそう言うと、家を飛び出していったものだった。

「それでも、まだ可愛かったよな」

智太郎は、テーブルの席から、仏壇の千代子の写真に語りかけた。千代子は、ただ黙って微笑しているだけだ。

「おどろいたのは、さおりが社会人になってからだった・・・・信じられないことを言いだして・・・」

淡く焼けたトーストを小さく千切り、智太郎は口に運んだ。簡単な朝食である。コーヒーを多めに口中に流し込むと、バターの香りとトーストのこげぐあいが、うまく調和して、ほろ苦い味がした。

・・・・この味が、おれの人生そのものだったのだ。

智太郎は自嘲ぎみに苦笑した。長男の賢太郎は世話のかからない息子だったが、さおりには振り回されてきたのだった。

遊びにあきたのか、さおりは、突然勉強をしはじめた。そしてT音楽大学に入り、昭和五十六年、二十二歳で卒業した。専攻はピアノ科であった。幼いころからピアノを叩いていたが、やはりその道に進んだのであった。

さおりは、中学校の音楽の教師となって東京のある私立学校に勤めた。

このときは千代子もまだ元気であった。智太郎は千代子と手を取り合って喜びあった。赤飯を炊いて、家族四人で祝った。長男の賢太郎も私立大学の経済学部に合格し、二重の喜びであった。やっと肩の荷を下ろした思いだった。

「こんな嬉しいことはない。良い子どもに恵まれて幸せ者だよ、わたしたちは」
智太郎は、求めていた平凡な喜びを手に入れた思いで涙した。
しかし、それも束の間で、さおりはドイツの音楽学校へ留学してしまった。中学校の教師になって三ヶ月勤めただけで。
「わたしたちの意見も聞こうとはしなかったな」
智太郎は、再び仏壇の千代子の写真に語りかけた。言わずにはおられなかったのだ。
「あんたが甘いからいけないんだ。せっかく貯めた金を全部持たせてやって・・・」
しかし、智太郎はその妻の行為を恨んではいなかった。二百万円近い大金ではあったが、妻がいなければ智太郎も同じことをしたであろうから。智太郎自身も絵描きになるのが夢だったから、その気持ちは分かるのだった。結局は、夢を捨てて経済学部へ進んだのだが・・・。
ドイツのさおりからは一度、手紙がきた。昭和五十六年八月の末であった。そこには、九月からある音楽院に通うこと、個人指導をしてくれる先生も見つけた、と書いてあった。アルバイト先も、先生の紹介で何とかなりそうだ、とも記されてあった。
それから三ヶ月後の十一月末に、妻の千代子は呆気なく胃がんで亡くなった。もう手遅れで、手術もできなかった。胃壁の外側が冒されていたのである。原因はストレスらしい。「おれはさようならと言っていないぞ」夫婦の愛に泣き、不運に憤る夫でしかなかったのだ。
智太郎は動転して気が回らなかったが、息子の賢太郎は機転がきいて、自分の判断でさおりに電話を入れた、と言った。
「いまは、とても帰れないって。学校に入ったばかりだし、お金だって浪費したくないって、姉貴」
「浪費だって?本当に浪費って言ったのか」
「ああ、はっきりとそう言ったよ・・・・」
「一人しかいない自分の母親が死んだっていうのに」
「姉貴は、今がとても大事なんだよ。それに亡くなった人は、もう生き返らないんだし・・」
「あきれ果てた子どもたちだ。これが親子のつながりか!全く信じられない」
「おれに当たるなよ、姉貴のことで」

気持ちの優しい賢太郎は、目をしばたたきながら席を立った。
・・・・・・そんなこともあったな。
智太郎は、琥珀色のコーヒーを覗き込んだ。そこには千代子の顔が浮かんだ。まだ若い頃の生き生きした表情である。
「お父さん、子どもは親を踏み台にして育っていくものですよ。怒っては駄目ですよ」
「でもなぁ・・・・」
「ひどすぎはしないか?」
「お父さんだって、絵描になりたかったって、何度も言ってらしたではありませんか。さおりだって、立派なピアニストになりたいんですよ」
「うむ!それは、ドイツへ発つときも、そう自分自身に言い聞かせたものだった。しかし、あんたが亡くなってから五年後のこと・・・あのときは本当に驚いたよ・・・」
智太郎はコーヒーカップをテーブルに置くと、目を閉じ溜息を放した。

三　回想

昭和六十一年の二月のことだった。
この年は例年にない寒波が日本列島に居座り、暦のうえでは立春を迎えたが肌寒い日が続いた。今日も外は吹雪で、ガラス窓から眺める雪の舞いはいつまで見ていても見飽きなかった。雪片は右から左へ流れたかと思うと、次の瞬間には舞いあがり、そして急降下した。
その日は日曜日で、久しぶりにのんびりとした心境でぼんやりと眺めていた。
息子の賢太郎は大学を出て、去年から会社の独身寮に入っていた。息子の勤務する会社は日本で一、二を争う自動車会社であった。「二、三年したら、アメリカへ行かされるらしい」と、先日、正月休みに帰ってきたおりに、洩らしていた。
「おまえも、やっと一人前になったようだな」
智太郎は満面に笑みを浮かべて、賢太郎と杯を交わしあった。賢太郎は智太郎よりも十数センチは背丈が高い。おそらく一八〇センチはあるだろう。
賢太郎は、だれに似たのか勉強好きであった。子どもの教育は妻の千代子に任せきりであったが、千代子は俗にいう教育ママではなかった。にもかかわらず、小学

五年生のころから、賢太郎は教科書と首っぴきであった。細面で色白、背丈だけはぐんぐん伸びた。中学へ入学するころには、既に一六五センチはあった。

・・・我々の年代は、育ち盛りに、まともに食べられなかったからなあ！

昭和十一年生まれは損をしている。終戦のとき国民学校の四年生であった。勉強する時間はなくて、避難訓練ばかりしていた。校庭にサツマイモを植えたり、砂場を耕して野菜の種を蒔いたりしたのだ。

故郷の福井は雪が多くて、今日みたいによく吹雪いていた。来る日も来る日も、降っていたものだ。

昭和六十一年といえば智太郎もまだ五十歳で、幾らか若さが残っていた。顔の表情にも艶があったし、今みたいな腰痛もなかった。

娘も息子も、それぞれ自立している。何よりだ。これが本当の幸せというものだろう。

実感として、智太郎は自分を素直に受け止めていた。

「これも母さん、あんたのおかげですよ」

仏壇を振り返って笑いかける。これは千代子が亡くなってから、癖になったようだ。話し相手がいないのだから、当然といえば当然の成り行きであった。もう、かれこれ五年になる。

「なかなか止みそうもないなあ」

庭のヤブ椿にも雪が積もっている。赤い花が幾つか見える。白と赤の色が、お互いをより鮮やかに浮かび上がらせている。どうやら昨夜から降っていたのだろう。団地の庭も珍しく白一色と化している。茶色と白色の犬が二匹、走り回っているのが、唯一、動いているものである。それを智太郎は、さおりと賢太郎の幼いころに見立てて、しばらく心を和ませた。

そのとき玄関のブザーが鳴った。人の心を急がせるような慌ただしい押し方だった。

「こんな雪の日に、いったい、だれが・・・・」

智太郎はひとり呟いて窓辺から離れた。ダイニング・キッチンを横切って玄関を開けると、そこには長身の厚化粧をした女性が立っていた。濃いアイシャドーと、朱のルージュと頬紅をつけて・・・。

一瞬、智太郎は立ち竦んだ。そして、やっとのことで、

「よ、さおりか?」
と、声をかけた。さおりは小さくうなずくと、
「お久しぶりね、お父さん」
と、どぎつく塗った唇を開いて笑った。

結局、その夜遅く、さおりは、「演奏旅行があるから」と、家を後にした。
そのとき、「はい、お父さんへのお土産。アメリカの腕時計なの。新婚旅行で求めたの」
と、説明した。
「新婚旅行って・・・・おまえ、まさか・・・・」
「詳しくは今度話すわ。今回は忙しくて、ゆっくりしていられないの。日本の各地でジャズ演奏なの、これから一ヶ月・・彼も同じ音楽の仲間よ。今度、紹介するわ」
「親に一言の相談もなしに、勝手に結婚したのか」
「おこらないで、お父さん。外国で暮らしていると、独りっきりで、無性に寂しくて、苦しくて・・・・何か信じられるものがほしくって・・・・そういうものがあると、生きがいも出て、張り合いになるって・・・・必死に神様へお祈りして・・・・それで・・・・」
「ドイツ人か」
「アメリカ人・・・・背が高くて、すてきな人なの。快く許して、お父さん」
智太郎は、昔からさおりに振り回されてきたが、このときも同じ苦汁をなめさせられた思いがした。
それでも、既成事実の前にはどうしようもなく、「それでは元気でな」と、送りだしてやったのだった。
「クラシックの勉強に行ったはずじゃなかったのか・・・」
智太郎は、そのときも千代子の写真に語りかけた。千代子は、
「さおりが言ってましたね。子どもは親の所有物ではないって・・・・そういうことですよ」
と、にこやかである。
「あんたはいいよな、この世の人ではないんだから。残された者は哀しい思いをしなくちゃならん。不公平だ」
智太郎は、さおりの腕時計を左手首にはめてみた。さおりの好みなのか、それと

もアメリカの腕時計はみんなそうなのか、金ピカの外装、金ピカの鎖であった。
「こんな派手な腕時計、はめられるか」
机上に放ったものの、さおりの選んだ品だと思うと、妙な愛着も湧いてくるのだった。
・・・・親になんか、なるものじゃないな。
智太郎は腕時計を再び手に取ると、改めて左手首にはめてみた。
・・・・母さん、さおりからの初めてのプレゼントだよ。
鼻の奥に表現しにくい強い衝撃が走った。こらえると視界が歪んで揺れた。

四　娘が帰る

二度目にさおりが千葉県松戸市小金原の家へ顔を覗かせたのは、それから四年後のことだった。
ドアを開けると、派手な化粧のさおりが立っていた。この前と違っていたのは、一人ではないことだった。傍らに三歳ぐらいの男の子が並んでいた。しかも、その子の肌は黒かった。髪はちぢれて、目は大きく見開いている。人なつっこい笑みを浮かべて、その子は言った。
「コンニチワ・・・・オジイチャン・・・・」
智太郎は、頭のてっぺんから血の気が引くのを覚えた。手の指はわなわなと震えた。
「お、おまえの子か?」
「そう、かわいいでしょ!」
「と、とにかく入るんだ」
智太郎はさおりの腕をつかむと、強引に玄関へ引き入れた。
・・・それからの経緯は、母さんも知ってのとおりさ。その仏壇の中から、高見の見物ときめこんでいたんだからね・・・。
智太郎は、やや皮肉を込めて千代子の写真を見やった。
あのとき、智太郎はこの仏壇の前までさおりの手を引っぱってくると、
「さあ、お母さんに、どう報告する?顔向けできるのか、この馬鹿者」
と、座らせた。さおりは、居直るかのように言った。
「罪人扱いしないで。私は立派に堂々と生きてきました。だれにも恥ずかしいなん

て思っていません」
「そんな子を生んでもか」
「それは、黒い男性を好きになったのは、お父さんには悪いと思っています。でも、彼は本当に優しくて、私を心底から愛してくれています。彼は生まれついてのジャズメンで、作曲だってこなすし、トランペットだって一流なの。偏見はやめてください」
「・・・・」
「お父さんは、いつも言ってらしたわ・・・・人を外見で判断してはいけない。肌の色で差別してはいけないって」
「・・・・」
「だから、わたし、お父さんに喜んでもらえるって、内心では、誇りにしてたんです」
「・・・・」
「でも、それはお父さんの単なる似非ヒューマニストとしての、身を守る手段にすぎなかったんだわ」
「・・・・」
「もう二度と、わたしはここには参りませんので、ご安心ください。さようなら」
さおりは、そう言うと、子どもの手を引いて家を出ていった。智太郎は追わなかった。追う気力も体力も残っていなかった。畳に座りこんだまま動けなかった。

五　息子の死

「ちょっと酷だったかな・・・・」
智太郎はさおりのことを考えると、胸が締め付けられそうになる。しかし、勝ってなさおりには同情はマイナスとなるのだ。あれで、夫婦の絆がかえって強くなるだろう。
智太郎の哀しみが、半ば癒されてきた三年後、新たな衝撃が彼を襲った。平成六年の春四月十日であった。
ゴールデンウイークを控えて、長男の賢太郎は中央高速道路を疾走していた。会社の友人二人と穂高へ登攀するためである。
笹子トンネルに入って、しばらく進んだところで、急停車した前の自動車に追突

したということだ。
幸い、友人二人は軽傷で済んだが、運転していた長男の賢太郎は、事故の責任をとったかのように即死した。
智太郎は、唯一の希望の星である賢太郎の死に三日三晩、酒を浴びるほど飲んでは、泣き明かした。今秋には結婚式を控えていたのに・・。智太郎は、死ねるものなら、自分も後を追いたかった。あまりの哀しさに、写真は飾る気になれなかった。長男賢太郎の死を、認めたくなかったのだ、今も、心の中にしっかり仕舞い込んでいる。

六　残りの人生

智太郎は三杯めのコーヒーを入れた。
そして、深い溜息をもらした。掌中の珠というべき二人の子どもは、もう手の届かない遠い所へ行ってしまった。智太郎は肩を落として、ただ平凡な幸せを求めただけなのに・・・
と、神さまを恨みたくなった。生きがいのない独りきりの生活は、虚しいだけである。妻という最愛の女神を失った時、男はどう生きるのか考える余裕はなかった。
「これが、六十年生きて来たおれの代償か」
そして、もう一度、溜息をつきながら仏壇の千代子の写真を見やった。千代子は相変わらず屈託なく微笑んでいる。それも優しく慈愛を込めて・・・。
「これからは、ご自分の時間ですから、お好きなことにお使いなさいな」
「好きなことって・・・」
「絵を描きたいって、言ってらしたでしょう、あんなに・・・お忘れになって?」
「でも、今さら・・・」
「それでは、画廊でも経営なさったら。そして若い絵描きさんをお育てになるといいわ」
「貸画廊か」
「銀座の裏通りになら安いのが・・・そんなに広いスペースでなくてもいいんですから」
「そうだな。おれも、ひまを見つけては描けるかも・・・」

「ぜひ、そうなさいませ。せっかくの退職金ですから」

「残りの人生だものな」

智太郎は　明るい太陽の陽射しが差してきたような気持ちになって、残りのコーヒーを飲み干した。

葛岡　昭男（くずおか　あきお）

略歴
元証券マン・作詞家・エッセイスト
日本歌人クラブ会員・新アララギ短歌会同人
日本音楽著作家連合会員

著書
珠玉の政治思想（鹿島出版）
ゆくりなくも（鶴書院）
岳父と枝豆（鶴書院）
蘇生の槇（鶴書院）
私の母物語（日本文学館）

受賞
文部大臣賞
読売新聞社賞
産経新聞社賞
流山市長賞
北原白秋献詠詩賞　他